

大阪一乱起の覺書

210.4

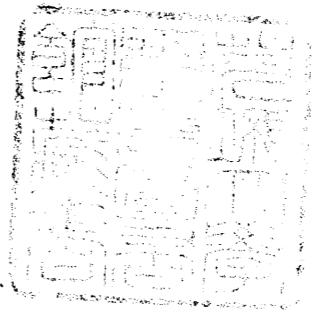
0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 7

タイトル番号：0029

書名：大阪一乱起の覺

1冊

櫛木藏書



大坂一乱起之条

一 慶長十九甲寅年八月初日大佛之堂法養院秀頼公  
可成所執行日限相定、如前日駿河使、大坂所  
板倉伊賀守不之、柳下松子就有之儀儀式相止不  
事

一 此為河内郡市正並大坂之河城女中大野修禪母大藏  
卿渡邊内藏外母正永駿河一向傳共府中不之儀  
河内市正並九子誓願寺統居住不其故大佛鐘之  
銘、河内郡河不審法開百儀河内是、大坂、  
家康様と調法、との河内意之由、其下、大佛供養之日

京中燒立可申由大坂よりこのころの通風説  
大洲新橋の間に市正の存否も其間百の得共説  
成り得由の然共其の程色々市正の上府内者免證  
府中一蔵成呼入の其時為 上使中多上列金地院  
河加の河加也 上意なき鐘の銘の儀去市正文音  
故存間鋪の同成成用捨の 大洲新橋の後に戸  
將軍権と秀頼公との中益相遠の核の約の河使  
市正は得と説 御内市正河請ふ此十五ヶ年前  
由 河新橋より秀頼公河如在蔵成間敷の  
河内書と然成下秀頼公河老母より對面 河新橋

先頭不義と思ふ間敷有河書物と取差中此度去  
河相書紙を河握の松ふ秀頼公の可も上此説と市正の上  
得之上列金地院等の中右松の儀して中相濟  
中間敷の市正分別の計可等の中 河新橋より  
河好成間敷有河御の此上早速河請難成存の  
左のく大坂罷歸 河説の報中上其の上可得の意  
とて九月十日より市正殿河と罷之上の事  
一 道中の中敷度大藏卿正永 大洲新橋河意如何と  
相尋第の得共市正少もこの子細不中罷上は  
同十六日之夜の別と上河のく又大藏卿正永同道

高市に接宿糸 市制條 市設之松子幾相尋の  
其時之市に返事小何之松子不然 仰出以魂之  
沙使中松小と 市意之由府令上列金法院へ右  
次才の得共時明かしく山間羅上のと市心中其時  
大藏卿に承きて市心如何分別裁と第の其時  
市心中のいかに如何程も沙入魂之儀は後得去  
大倉極多遺言もあち中事小の然と思案は之國  
一之名城は成沙彦有 市制條多氣造は後田言  
如此に 仰出存問所詮諸國大名衆と小秀頼  
公談成は在口の死も後様と沙證人の口は成爲下

の終不熱ハ大政多城と成差之他國あり今之山領分程  
就遣出松小と市制條此之條之外市心分別無之由  
中の得去尤之由第の其後夜通小大藏卿に承  
大政ハ成罷歸 大市制條沙内意之通市心尋の  
如如此沙彦と色之偽中上之之條之儀は中上之由  
市家松茂秀頼公は其因に此因一之條も沙同心可成  
沙心彦と色沙彦の定る 市制條と市心も一味は如  
中のと市制條と市心如何出討可成裁と成山設合  
申之事

一同廿二日之夜大岡雅樂頭所為人野修保本村長邊

内藏ありと色立の談合相極の常真公の以生駒  
長玄清梅心ある兼の舟世之日早朝の常真公より  
市正助の河内状事不及の返事家来小嶋庄の常  
者と右の右使相添遣の常真公の河内直可  
先立何の市正殿の事新六事之儀之向可談御聞の  
他言は間敷者金打仕の得の儀舟任其意中の處  
常真公の河内中六六太坂河内九其外若き者共の初光  
談合今度之条之内一も出同心不成簡市正殿者  
昔より小駿河へ差下其跡より市正妻子以下相  
互勝正とも生害とせ色と可談成出之始又市正小

先の切腹可談御付宛との談合言の得共昨夜の談合  
相極の市正小河内常真成出對面可談成河内談合の条  
河内九一糸の松と談御出河内候常の廊下より生害せ  
はせ互勝の千疊鋪を殺其後市正互勝屋鋪に  
取掛の妻子并家来者ふはは家小大と掛  
河内籠城可談成河内談極市正兄弟の討子河内城  
相構屋有儀小の常河内勿所儀と談思言河内通の由  
此御の其時庄の常真公へ上り糸河内意河内  
併市正彌兼河内松山書付は下候と申知  
尤も得共時刻相移の間金打談極の河内常真公の談

言之上金打込成梅心長之傍長金打込は間急罷  
歸市正委中の為城小煩出由中箱の為其日出仕止  
事

一廿之日市正登城毒儀沙袋様秀頼公成沙不書  
沙小姓衆之入替く見事大藏卿二位おく一も其  
沙袋様秀頼公より其後敷通之由事より一の書様  
横の書紙も沙不の得廿二日之晚に織田有樂屋鋪  
改所横沙屋敷其外所之櫓へ具足と着弓銃炮其外  
兵具之對へ敷入中の付右へは書紙通之より一  
奉海城市正五膳正家中之者共上下之屋敷相

籠可成戰覚悟仕の得共市正五膳下へ付公向沙  
城箭一銃炮一相放し可為由事の嫌と系裁者より  
捨へ柄より打さる事一はと中付事

一右之通下之追色事の付五膳正七組之衆は中へ  
私方へ秀頼様も書様様も何之所立之無之得共見  
市正肖沙様様の上沙不の事一市正不義之答  
の去對秀頼様色頭可中へ松無山床得共理不盡之  
能提松之上沙奉公仕松無山床の道へ一所  
可罷成由中上廿五日城へ罷歸其後出仕不仕事  
一然知七組之頭伊藤丹後守進次郎兼守首木兵部補







刻市正屋鋪羅出の至膳一而先結とす其  
外下の中村の飯子細有之於木一屋敷間其首  
相心得可也由中彼の系物少く相織斗着市正屋出  
の其次兄才之妻子家中の足弱も其次小至膳心  
罷之尤行列され不し不系りし之膳心其外侍之者  
共速具足と着道具も扱身不仕火繩も火と付為持  
中の事

一右之見送り小七組之衆大坂より一里程於羅出の野  
修理子信濃織田有樂子武藏へ質取の付り  
この目とてかたき馬小荷鞍と置道具あり

侍取者一人徳川世に連中の河別荒川右へ質  
取ありてかたき馬小荷鞍と置道具あり  
の事

一駿府赤江戸市正十月二日の使者と着下同日之晚  
駿府より不多上野へ使者口上之段中達如早達  
河内柳市村の事 原上之類沙直小蔵河守中  
上如殊外河感は違今度市正之膳心儀内は御聞の  
旨無相違手柄成立邊候無比類儀と申儀美は持沙  
機嫌殘前無沙彦の市正方日 河内書可茶下間由  
使之内一人有是羅上一人其下は下 將軍柳の

